



慌ただしい日常
 私が旧長谷村(現在伊那市)の美和診療所に赴任して三年がたちました。田舎の診療所という、のんびりムードを想像しますが、長谷地区や近隣市町村から訪れる八十人から百五十人の患者さんの外来診療と、在宅診療、予防活動などを医師二人でこなし、あわただしい日常が

「高遠のコヒガンザクラ」が散ると、山の木々がいつせいに芽吹き始め、自然の躍動を感じる季節が到来します。
 この季節、高齢化した住民たちは腰びざの痛みをこらえ、農作業を始めます。美和診療所のある長谷地区は、桜で有名な高遠に隣接した南アルプスのふもと山村です。

本当の福祉の充実って？

流れます。

私が赴任した年、シヨックを受けた出来事がありました。近す。

くの老人ホームの端午の節句のお祝いに招かれた時のこと

そこで見たのは、人形を抱いてその頭をなで、涙を流して、背くらべ」を歌う高齢の女性入所者でした。休日だったので、

悲しくなりました。

赴任当初、医師は私一人であり、遠くに出かけることができませんでした。子どもが夏休みに入ったある休診日、私の子ども四人と、診療所の超音波診断装置で身体の中を見て遊んでいました。

子供のチカラ

その時、老人ホームの暴れ者で嫌われ者の認知症のおじいさんが、顔に大きな傷を負って来院しました。「こんな暴れ者の顔をどうやって縫うんじや？」

病院へ送り全身麻酔でやってもらおうか？」と私がひるむと、施設の看護師は「先生は確か外科医でしたよね」と。

「うーん」。負けず嫌いの私

は、意を決して診療所で縫合することにしました。どうせなら親の勇姿を子供に見せようと、無駄かなと思いつつも、おじいさんにその旨を告げてみました。

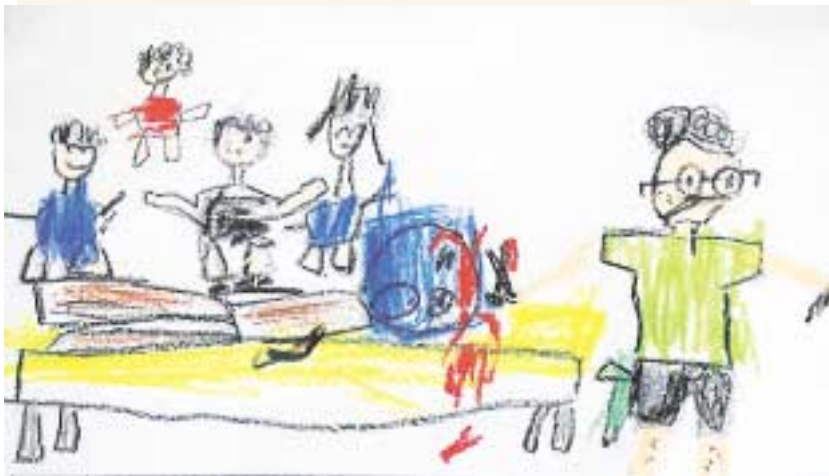
すると、子供の視線を察した彼の態度が急に変わったのです。「よろしく」と行儀よくベッドに横たわりました。そして四人の子どもに手足を握られ、局所麻酔のみで穏やかに縫合手術を終えたのでした。さらに、「坊たち、ありがとな」と想像もしなかつたような言葉を残し帰っていきました。

その日の子供の絵日記には、傷を縫う父の勇姿？ が描かれていました。認知症でも子供の視線を感じると、こんなにも変わることに驚きました。怖るべし、子供のチカラ。

多くの老人ホームができ、高齢者が集められ、福祉の充実といわれます。本当ですか？ 平成のウバステ山を作っていますか？ もう一度、家族や子どものチカラを考え直してみませんか？

(次回予定は鳥取県)

岡部 竜吾 12期・1989年卒



高齢者の顔面を縫合した日の子どもの絵日記

伊那市美和診療所

【私の勤務地】旧長谷村は人口2200人、高齢化率39%の山村。美和診療所はコンピューター断層撮影(CT)、超音波診断装置、電子カルテ等を装備したハイスペック診療所。西洋と東洋の医学の融合を目指す。鍼灸(しんきゅう)治療、心理カウンセリング、パワーリハビリ等も行う健康増進センター、小規模多機能受け入れ施設等を隣接し保健福祉との連携を図る。